
いくせい、もんすたぁ！！

にえる

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

いくせい、もんすたあ！！

【Nコード】

N1720Z

【作者名】

にえる

【あらすじ】

俺は最強だ。

自分で言うのも何なのだがマジで強い。

魔法も使える。

マジ大魔導師。

地形破壊も余裕。

普通の学生だったが浮浪者とか狩人、助手、e t cと様々なジャンルをやっていたくらい最強だ。

そんな俺のハートフルな異世界ライフ。

おれ

俺は最強だ。

しかも無意識のうちに異世界来訪を果たした。
逆だな。

無意識のうちに異世界に来たら最強だった、が正しい。

平々凡々な学生だったがここに来てからは浮浪者とかモンスターハンター、助手、etcと様々やっていたくらい最強だ。

好物はカラギマンゴー、出来れば酸味が効いていると嬉しい。
酸っぱいのは安物と決まっているのだが、好きだから仕方ない。

何も言わずに安上がりな最強だと思ってくれ。

そんな俺がどんくらい最強かと言うと超ヤバいくらい強い。

隠しダンジョンの最奥にいる裏ボスくらい強い。

超人的な身体能力に加えて魔法も使える。

リー・ポッター系では無く、漫画とかゲーム的な魔法。

大魔導師とか世捨て賢者、忘れ去られた英雄級。

魔法を使ったら「これはメラではない、アギだ」って出来る。

アギとは炎をポツと出す魔法だ。

試したことは無いけど簡単に人も殺せる火力を引き出せる。
最強すぎてごめんね

誰が俺に与えてくれたか分からないが感謝しておくとする。

見ず知らずの異世界にパンピーのまま放り出されてたら死んでいた
から感謝しておいてやる。

だが、異世界に送ったやつと同一人物だったら許さん。
チエーンソーでバラバラにしてやんよ。

たぶん神様のな超常存在がなんやかんやしたに違いない。
神とかマジ許さん。

テスト前に祈る程度の信仰心しか持ち合わせていないのに、こんな
サービスとか別の誰かにしてあげてくたしあ。

むしろ信仰心が低いから別の世界に捨てるという罰かもしれない。

天罰こえー、サイキョーでも天罰こえー。

あたいつたら天罰ね！！とかやったのかもしれない。

ナインボール神の天罰はやべえな。

もう、本当にNICE JOKE。

折角の異世界来訪だから魔王を倒して勇者になったり、モテモテに
なったりとかしたかったがどうやら御呼びで無いらしい。

魔法なぞ火が無かったときの種火や腕がもげた時にくつつけるくら
いしか使い道が無い。

でもリアルモンスターハンターの時とかも使ったし、メギドラオン
で襲撃したときも使ったから、存外便利なモノである。

使い道が無いとか言ってスマナイ、魔法さん。

とりあえず公の場では使え……ない、たぶん。

ここがどんな世界かと言うと、モンスターを使役して、育成して、
戦わせるのが主なゲームの世界である。

ポケモンをバイオレンスにして、テリワンの育成ぶちこんで、デジ
モンをくつつけたみたいなのを想像して欲しい。

想像できただろうか。

そう、モンスターファームの世界なのだ。

想像できなかつた諸君も涙で枕を濡らす必要はない。

なぜならほとんどのゲームに共通している事項だからだ。
シーマンも捕獲してから育てるし、放っておくと死ぬからね。
シーマンの世界じゃなくて良かったです、キモいのはマジ勘弁。

まあ、完全にモンスターファームの世界かと聞かれると肯定しにくい面もあるので平行世界と考えればよろしいのではないだろうか。
似てることもあるし、似てないところもあるから発見したら二度おいしいって感じで。

で、モンスターファームってのはCDからモンスターを再生して、育成して、大会に出して名人を目指すゲームだ。

モンスター同士を戦わせるゲームであって人間とかお呼びじゃない。一応必要だけどブリーダーに必要なのはポケモンマスターになれる能力的な才能であって、制圧力とか武力とかでは無い。

もちろん、戦闘力でもない。
モンスターの気持ち解るとか話せるだったらサイコーだ、俺には無いけど。

マジやべえ魔法も使えるし、余裕でモンスターも倒せる。
剣とか超得意、槍だつて振り回すよ！！

でもモンスターとの会話は勘弁なつてくらい無理。

ああ、でもあれが出来る。

ボディランゲージつてやつ。

超得意、拳で語るやつだけど。

なんと勿体ないのだろうか。

才能の差に苦しんでいるオリ主に分けてあげたいくらいだ。

……あいつらつてヒロインがいるしハーレムを作るやつもいるんだよな、やっぱり無しだ。

リア充に能力を分け与えるなんてとんでもない！！
何処かしかで成功するのだから、存分に苦しんで生きてね
俺はブリーダーになってブルジョアとして生きるよ！！

まあ、そんな感じでモンスターファーム世界なのでブリーダーにな
ったわけだ。

金持ちの職業みたいな部分があるから、浮浪者してた俺がブリーダ
ーって凄い事かもしれない。

浮浪者からブリーダーだなんてシンデレラストーリーは前代未聞か
もしれん。

褒めてくれてもいいのよ？

そんな俺の努力の過程なぞスキップだ。

そのうち語るかもしれないから大丈夫です、全く問題ないです。

エヴァ先輩というブリーダーの元で助手をして、ドラゴンを育てて、
推薦もらって、学校に入って、リアルモンスターハンターしながら
勉強して、第二の青春を送り、ヘンガーを育てて、メギドラオンし
て、卒業して、リンディ校長に挨拶して、I Maとかいう協会に来
た 今ここ。

今の俺は卒業生であり、新人ブリーダーでもあるのだ。

新人ブリーダーでありながら能力は最強だ……あ、身体能力の話だからね。
いつまでも引つ張って女々しいとは自分でも思っているのだけれど諦めきれない。
もったいないくらい超やべえチート能力。
無駄だけど……いや、ホントに無駄だけど。

新人は助手が付く。

新人だけでなく、段持ちでも助手を持つので特別だとかそういった事情は無い。

単に学校の実習として在校生が卒業生の元へ助手として手伝いに行くのだ。

実習先は希望制なので、自分で言うのも何なのだが不人気な俺に付かないと覚悟していたが一人希望していたらしい。

奇跡っ！！まさに奇跡っ！！求めた永遠は此処にあったのだ……っ！！

というくだらない想像をしてしまったくらいである。

実家の手伝いだったり、ブリーダーとして活動しない同期も多いので、実習生が余っていて、すでに卒業して幾らか経つ先輩や先生などの元にも助手に行けるのだ。

そんな人たちを差し置いて俺の元に来るとは聖人か何かかもしれん。

同期にも恩師であるアティ先生の元で今年も助手をやる予定の双子がいる。

俺も今年は助手として先生の魅力を間近に感じようとしたのだが金髪デコっぱちに邪魔された。

おのれ……。

まあ、そんなことはどうでもいいのだ。

俺の顔も名前も知らない助手を待っていると、前方にトコトコと歩いている二人組の姿があった。

片方は同期のレッド（仮）。

先輩の元で共に助手をしていた腐れ縁であり、本名を聞く時期を逃してしまい、呼ぶときに苦し紛れにあだ名を付けたのだ。

今もあだ名で呼んでいるのでわかるだろうが、未だに本名は知らない。

無口で、黒曜石のような輝きのある瞳と艶のあるやや長い黒髪なのでレッドだ。

半袖で冬山に立ってたら、挑戦者としてポケモンバトルをしたくなる……かもしれない。

相棒は電気ネズミに違いない。

俺のプレゼントした帽子を四六時中かぶっているのでどう見てもレッドです。

二人組なのでレッドの隣には女の子がいる。

どうやら彼女が助手のようだ。

俺の知識が正しければ間違はなくあの娘はコルティア、通称コルト。

モンスターファーム
MF2の主人公の助手をしていた不老不死のやつだ。

初期ロットでは仕事をしなくなるのだが、The Best版だとどうなのだろうか。

女の子が助手とかマジで羨ましい。

つつかコルトが助手とかやつが主人公なのだろうか。

……ありそうで困る。

レッドは才能にあふれていた、俺なんか比じゃないくらい。

学校ではトップで育成の練習でも教官に褒められてた。

俺は落ちこぼれ、ハイパークラス。

テストとか名前が消し去られる庶民。

魔法が無かったら卒業できなかつたレベル。

魔法を何に使ったかって？

ばっか言わせんな恥ずかしいノノ

強いて言えば、俺が本気出すとヤバイよ？ニヤニヤ、みたいな。

ブーストかけてワンパン余裕でした的な。

なんで催眠的な魔法が無いのかと小一時間くらい悩んだがカララギマンガを食べたら忘れた。

魅力的な何かならあるのだが。

テンタラファー先輩とか呼ばれるのはなぜだか嫌でござる。

しかもすぐ効果が消えるから何度もかけ直す必要があつて面倒なのだ。

つつか未だに何の作品の魔法かわからん。

神のオリジナルだったら嫌だ、俺の考えた最強の魔法みたいで。

今度ムドオンとかいうのを使うことにする。

メギドラオンとかかっこいいから使ったら東の丘と俺の怒りに触れ

たやつらが消え去ったのは記憶に新しい。
死んではいけないので大丈夫だ、回復魔法をかけて攻撃とかやったけど大丈夫だ。

犠牲になつたのだ、俺の怒りのな。
すつきりするけど街中では使えないだろう。
無差別殺人とか柄じゃないのだ。

そんな超絶天才のレッドに可愛い助手が付いた。

才能に恵まれ、言葉少ない甘いマスクはマジでイケメン、それに女運だと……？

羨ましい、マジで羨ましい、超羨ましい。

妬ましくてパルパルしちゃうわ。

もう俺つてば死ぬしか道は無いんじゃないかね。

とか考えながら眺めていたらコルトに睨まれた。

あ？やんのかコラ？

俺はホリイ派なんだよ、ふざけてつと愛でるぞこの野郎！！

丁度いい位置に頭があつて撫でやすそうだぞゴルァ！！

つてガン飛ばしたら涙目になりながら震えていた。

……なんで俺が見たらみんな泣くんだよ。

妹とか弟とか、霞とかは普通なのになぜだし。

レッドが俺に気付いたらしくくて控え目に手をふりふりしてきたから、俺も軽く返す。

とことこと近づいてきて右拳を掲げてきたのでこつんと軽く合わせる。

そして満足気にこくこくと頷きながら帰って行った。

拳を軽く合わせるのが俺とレッドの挨拶だ。
いつから始めたかもこれまた忘れたが、気付いたらやっていた。
無口なレッドにはちょうどいいし、これからも続けていくだろう。
レッドは悪い奴じゃないので、妬むのも呪うのも止めてやるうては
ないか。

べ、べつに数少ない友人だからって理由じゃないんだからねっ！！
……あとコルトが忘れられているんだがどうすればいいのだろうか。

助手が来るまで、空白の時間ができてしまった。
コルトは俺を睨んだ後、走ってレッドを追いかけた。
やつの睨みにはハムスターを感じる。
つまり全く恐ろしくない。

俺が本気で睨んだら人が死ぬ。

……魔法の力だから、目つきが悪いとかそんなわけ無いじゃないで
すか。

だって妹がくれたバンダナで目が隠れてるから目が合うこともない
し、そしたら不意の事故であつても睨むことも無いだろ。
妹の気遣いに泣いた。

そして学校に在学中はバンダナ巻いたまま過ごした俺の姿にまた泣
いた。

つうかバンダナ巻いてるのに泣かれるとか理不尽だろ。

そんなことをつらつら考えていたら俺の助手が登場。
長い茶髪に冷たい印象を与えてくる無表情。

少し息が上がっていて肩が上下している。

急いで来たのだろうか、うっすらと汗をかいていて頬も少し赤くなっている。

冷たい無表情と言うか、緊張で表情が固まっているだけかもしれない。
どう見てもリオです、可愛いけどなんとも言えない違和感。

MF4ってことは登場するハードが違うからだろうか。

俺の世界はPS1、リオはPS2……バグるから畏れているのだろうか。

一応繋がっているとはいえ、俺の世界を貴女が登場する世界で再生するとバグるから島に帰れ。

ファンくとガルウでも育成してるよ。

彼のバンダナと俺のバンダナを間違えた可能性がある。

トウゲルの樹木爺とかマジでどうしたし。

冗談です、僕の助手になってくれてありがとう。

感動で俺は泣きそうだ。

まさか女の子が助手に来るとは……生きてて良かった!!

苦労を掛けるかもしれないがよろしく、としか口下手なので言えなかったが握手はちゃんとしたので及第点くらいは貰えるはず。

はい、よろしくお願ひしますと微笑みながら言ってくれたリオさん
マジ天使。

凍っていた表情が溶けたかのように一変して笑顔になったとか萌え死ぬ。

握手した手はほんわりと温かった。

やっぱり良い物だよね、人との触れ合いって。

決して卑猥な意味じゃないから。

ちよろつと話してみてもわかったのはMF4のリオとは同一人物ではないだろうということ。

名前はリオだけどリオじゃない、みたいな。

テキトーですよ、サーセン。

物静かな少女だし、大丈夫だろ。

きつと、たぶん、おそらく……だといいなあ。

冗談だ、良い娘に決まっている。

俺の助手に来てくれるとか運命ですね。

助手を休まれたりしたらモンスターと相性の悪い俺は最悪であるのでかなり頑張つて欲しい。

おまえなら大丈夫だよ！！やればできるよ！！俺が言うんだから間違いない！！みたいな激励も必要ならするかもしれない。

……ゲームの話だがリオの代わりに来るユリの可愛さは異常。

というかMF4に表れる女の子はかわいすぎる。

好感度が上がって頬を赤らめた姿とかヤバい、マジで嫁に欲しい。もちろんリオも可愛いよ。

髪下してても、ポニテでもどっちでも大好物です。

物静かだけど一緒に何時もいてくれるとか魅力が振り切っていて困る。

さて、モンスターを手に入れて育成と行くか。
モンスターか……テンションがマジで下がる、下がる、駄々下がり
である。

以前育てたドラゴンとヘンガーはいいやつだった。
つつか俺がモンスターと交流するのってかなり難しいんだよね。
威圧してるらしくて。

だから市場は無しにしようぜ？

え、無理？

ソ、ソナー！。

次回予告

今、蘇る我が忌まわしき記憶。

通称、黒歴史。

それってばモンスターの取り扱い全般なんだけどね！。

第二話『おれとりオ』お楽しみに

おれ（後書き）

ゆっくりまっててね！！！！！

おれとリオ

モンスターは数多く存在する。

見た目、能力、性格……異なる個性を考えるとそれこそ無限に広がる。

自分に合ったモンスターを選ぶ、その何気ない行動すらも新人ブリーダーは試されているのは無いだろうか。

そう俺は考えながら、市場を訪れた。

モンスターを得る方法は複数ある。

だが、新人のうえにコネも無い俺には手段が限られてしまう。

そのため大会の会場であるコロッセオへと続く大通りの市場に溢れる人の波へと身を任せることにした。

市場で買う以外には神殿に行き、持っている円盤石からモンスターを呼び出すなどもあるのだが、そんな高価な物を持っているわけも無い。

必然的に限られてしまったわけです。

円盤石つてなあに？みたいな諸兄のために説明するとモンスターが封印されている石です、ガチで。

昔うんたらかんたらがあつてモンスターは石の中に封印されたので儀式で再生して使役しようってことらしい。

「いしのなかにいる。」よりもジュラシックパークのDNAを解読して甦らせる方が近いのだが詳しいことは神官にでもならないとわからないので俺には一生の謎に違いない。

本当は最終手段として自分の中で妥協を繰り返してから来るはずだったのだが、リオが率先して俺の手を引っ張りながら歩くので、手を振り解くわけにもいかず来てしまったのだ。

「どのモンスターにしましょうか。私はロードランナーが好きなんですよね」とにこやかにリオが語りかけてくるがどうやらまだ気付いていないらしい。

モンスターを売買できるマーケットの近くまで来て表情が変わったのが見て取れた。

俺が近づいただけでモンスターが震えてしまう。

そう、俺があまりにも強すぎるために動物としての勘か何かで怯えられてしまうのだ。

このまま育てても勝手にストレスがマツハになり、自動で超スパルタ状態になってしまい俺のモンスターは死ぬというBAD ENDが待っているだけだ。

まあ、こんなものだろうと納得しながらマーケットを後にした。

何故かりオが落ち込んで俺に謝ってきた。

リオが良い娘すぎて俺は感動した。

ここで助手を辞められてしまうのでは無いかと覚悟していたが、そんな気はないらしい。

どうやら俺は素晴らしい助手を得てしまったようだ。

最強すぎてごめんね

まあ、リオが落ち込んだままでは俺の精神衛生上に良くないのでマ
ーケットは当てにしていなかったことを告げる。

俺ほどになると市場のモンスターでは満足できないのだとも続けて
伝えた……新人ブリーダーだけだ。

そんな簡単になるほどって納得されても困る。

純粹すぎるだろ、変な人に騙されたりしなければいいのだが。

日が暮れる前にはモンスターを捕ってファームに行く予定なので、
近所の山にピクニックへ行く感じの気軽な準備をする。

内容としては昼ごはんと飲み物だけとか完璧すぎて自分が怖い。

予定を教えるとリオが少し心配してきたが魔法使いの俺なら大丈夫
だ。

リオの目がキラキラしてるけど魔法に反応したのだろうか。

ちよつとばかり純粹すぎやしないだろうか、この娘……。

俺は今、カウレア火山にいます。

カウレア火山とは溶岩が垂れ流しになっている物凄く熱くて危ない活火山である。

上級モンスターの修行の場としても活用されるのだから一般人にとつて危険だろうと俺には全く関係ない。

最強なのでリオを守りながら戦つても余裕、魔法もあるので腕が？
げて足が取れていても頭さえ残っていれば簡単に勝てる。

流石に一緒に歩くのは厳しいだろうから背負いながら火山を進む。

岩山を苦も無く登り、溶岩の川を飛び越える俺に市場のモンスターなんて必要なかった。

日和った軟弱な市場のモンスターよりもワイルドでサバイヴァーなノラモンを仲間にすることに決めていたのだ。

どうせ無理だろうってわかっていたし。

仲間にするのは得意だ。

拳で優しく語りかけてお願いすれば不思議と友好的になってくれるだろうよ。

ここに来た目的はノラモンの捕獲だ。

ノラモンとはブリーダーが育成に失敗して逃がしたモンスターが凶

暴化したり、枷が外れて自由に生きるモンスターで、中には人やモンスターに被害を加えてくるモノもいる。

時には伝承でしか聞いたことのない超強力なモンスターが徘徊してたりするのでやべえよ、みたいな意味もあるんじゃないかなと思ってる。

そんなノラモンの中でもカムイとマグマハートが俺は好きなのである。

この2体はノラモン専用であり、CDから再生できなくて悲しくなったのも思いでの一つ。

そんなモンスターを捕まえに行くことにしたのだ。

カムイの分布は雪山、マグマハートの分布は火山。

流石の俺も装備なしで雪山に突入できないのでこのカウレア火山に来たってわけだ。

ノラモン捕獲のヒントはポケモンから得ました。

体力を削って交渉するのは俺自身なのだがポケモンとトレーナーの一人二役はきついでリオにトレーナー役でもやってもらおうかしらん。

ノラモンにもランク分けがあり、マグマハートやカムイはA。

ランクとは公式戦にも使われている強さを分類した指標のことで一番下はE、それから順にD、C、B、A、Sとなる。

Fというランクもあるのだがそのうち説明をしようと思う。

上位ランクのノラモンとなるとリーダーが育てた同じランクのモンスターよりも一回りも二回りも強靱でめっちゃ強い。

新人リーダーのモンスターなぞレベル1000のミュウツーとレベル7のトランセルを彷彿とさせるくらいの差。

ぶっちゃけると一睨みでぶち殺せるレヴェル。

そんなめっちゃ強いモンスターが相手だろうとも、忘れてる人もいるかもしれないが俺自身は強いのだ。

「戦闘力たったの5、ごみ……なに!? 100、1000、2000……まだ上昇するだ?!?」ボンッ

「ス、スカウターが壊れた……!? こんなことがあるはずが」あべしっ

みたいな展開になるほど強いのだ。

異世界だったら竜殺しの称号はおろか魔王殺しも確実である。

異世界のやつらは見る目が無いよね。

いくらか涼しい場所を見つけたので休憩がてら昼飯。

リオが拾ってきた円盤石のかけらとほのおの羽根を眺める。

円盤石のかけらは円盤石が砕けた際に来た欠片であり、合体の素材としても使えるし、高値でも売れるアイテムだ。

羽はゲームでのイベントを消化するとヒノトリというモンスターを得るために必要な物でこの世界では頗る珍しい。

ちなみにゲームの話だがフェニックス火山が初出なのだが、手に入らなかったらカウレア火山でも拾える。

ヒノトリは手塚先生に遠慮したのではないだろうかというくらいの高スペックを誇っているので大会荒らしとかに便利だった気がする。強いモンスターが出現するディスクを持っていないのでヒノトリで名人になった、みたいな人もいるのではないだろうか。

それくらい強いモンスターだ。

燃えるように輝く羽は見事なまでに美しく、気高き心は人を魅了する、と絶賛されるほど一度は育ててみたいモンスターとしてブリーダーでは人気を博している。

この世界で冒険してもゲームのようにアイテムが手に入らないのだが、こつこつ簡単に見つけるリオはどうしてなかなか強運だと言える。探検隊や捜索隊、救助隊も経験した俺が言うのだから間違いない。

カララギマンゴーを齧っているトリオが何かを見つけたようで、空を指していた。

俺が見た先は青白い炎の鳥が飛んできている姿だった。

数瞬で頭上へと到達し、青白い炎を撒き散らしながら神々しく降り立ったのはS級のノラモン、フェニックスだった。

ゲームで見るよりも透明感のある鮮やかな青い炎を纏っている姿を間近で見れるとは思わなかったが、守護者としては当然のことかもしれない。

自分で言うのも嫌だが、俺ってば邪悪だし。

どうしたものかと悩んでいるとチームを撃ってきた。

マグマハートを捕まえるつもりだったが、気が変わった。

コイツにしよう。

最強の俺と覇道を極めるのなら、最強であるべきだ。

チームがリオも巻き込みそうになったから怒っているってわけじゃないんだからっ！！

か、勘違いしないでよねっ！！

リオを腕で抱えながら魔法を放つ。

使うのはムドオンという相手を戦闘不能にする呪殺魔法。

紫の光がフェニックスを囲んで輝いたが効果なし。

不死鳥だから聞かないとでも言うんですか！！

そんなのおかしいですよ、フェニックスさん！！

もしかしたら地面タイプの魔法で飛行タイプのフェニックスには効かないとかとんでも理論があるかもしれないがムド系をヒノトリ種に使うのはやめようと思う。

ビームの余波でもダメージを受けると思うのでリオを庇いながら戦うことにする。

今の俺はめだか箱みたく昇りながら戦い、その後落下しながら戦う。「すごい、落ちながら戦ってる……」とかリオさんが呟いてるけど結構余裕あるね、君。

リオを途中でさりげなく岩場に隠して戦闘を続行する。

フェニックスも食らいついてくるがリアルモンスターハンターを経験した俺に勝てるわけがないのだ。

人間の限界を超えてこそ俺だ！！と言わんばかりの本気北斗有情破顔拳く（・・・）>テレットを使おうかと思ったがやめた。ビームとか超出るので相手は死んでしまう。

捕まえに来たのに殺してどうする。

殺さないように細心の注意を払って感謝パンチ。

感謝の正拳突きなどやったこともないのでただのテレフォンパンチである。

百式観音様は出てこなかった。

出たら出たで怖い……むしろ有り得そうだ。

倒れたフェニックスと暑さでバテてきたリオを担いで火山から帰る。

ノラモンを討伐したのだから賞金を戴くことにした。

修行地の幹旋をしている人を小ばかにしたような糞みたいな顔をしたオッサンを威圧して賞金を請求。

バンドナから目をチラチラと見せて威圧することも忘れない。

そうして存分に怯えさせて得た賞金は3000G。

確かに高額なんだが、S級を討伐してこれとは釈然としない。

解せぬ……。

倒れたフェニックスを右肩に担ぎ、リオを背負いながらファームへ向かう。

青白く燃えるフェニックスを眺めて達成感と世界に一匹しかいないであろうモンスターを手にした満足感に浸る。

俺は素晴らしい相棒とともに名人への一步を踏み出そうとしているのかもしれない。

……ごめん、ちょっとカッコつけてみたかっただけだし。

意味なんてない。

とりあえずマグマハートは次の機会にでも取っておくことにしよう。

俺がメギドラオンで吹き飛ばした更地のようなファームに着いたら
小さなテクノドラゴンが寝ていた。
なぜだし。

次回予告

勝ち組の俺。
始まる育成。
決まる名前。

第三話 『おれとリオとフェニックス』 お楽しみに

おれとリオ（後書き）

不定期更新なのでゆっくりまっけてね！！！！！

おれとリオとフェニックス

2月の末に卒業し、3月から新人ブリーダーとして羽ばたいたわけだ。

そんな俺のファームを見てほしい。

文字だけだから見えない？

心眼くらい使えるようにならないと社会に出たときに苦勞するのは君たちなのだから練習すべきだと思うのだが。

赤い弓兵の人だって弛まぬ努力の末に修得したのだから頑張るべきだ。

形から入るために赤い衣服でも着用してみてもどうだろう。

赤い雪男も「赤は緑と比べて素敵ですぞ」とか頭に赤貝を乗つけた赤いだわだわ人形も「緑よりも素敵だわ」って言っているに違いはない。

少しばかり逸れたが、つまるところ俺のファームが色んな意味で凄いのだ。

俺とリオが立っている何も無い平地と丘、そして丘の向こうには海が広がっている。

そんな場所のど真ん中に住居と小屋が存在しているとか凄くシユールでリオも驚いているのか言葉が出ないようだ。

寒々しい場所だが澄み渡った青空は、悪くないと思ってしまうから俺も現金な人間だ。

この小屋だが俺が時間を見つけてコツコツと形にした自信作だ。会心の出来だと思っている。

住居は大工を呼んで作ってもらったが実に素晴らしい。
大工さんをべた褒めしたが、そうでもないの一言をもらっただけだ
った。

大工さん、謙虚ですね。

俺が建築しても良かったのだが本職にやってもらったほうが安心で
きるし、やはり謎のチート能力による学習効果で作った家とか怖く
て住めないわ。

そつえば妹が未だに住んでるって手紙が来たから帰省したら軽く
注意しておこう。

俺はファームを自作したがレッドは小屋と居住区が土地に付属して
きたとかマジで羨ましいでござる。

しかも街に近いので買い出しも楽とか。

俺なんて海が見える僻地だぜ……。

まあ、土地とお金が支給されているのでそれほど文句があるわけ
もない。

卒業当初は土地すらなかった俺に校長が融通してくれたという幸運
補正で文句を言ったら罰があたる。

でもレッドとの待遇の違いで文句出ちゃうのおおお、らめえええ、
みたいな

土地を紹介してくれた校長マジ天使。

申し訳なさそうにしてたけど、全然かまわない。

校長と会話できるとか超ご褒美。

だってリンディさんに似てるんだぜ、リリなのに出てくる人妻。

こっそりリンディさんと呼んでいるが、本名は………忘れた。

とりあえず校長が結婚してくれたら許しますなんて真顔で言ったら冗談に取られたが俺は本気だった。校長は未亡人なのにあの綺麗さとか、俺がオリ主だったらどうにかしてフラグ立てるレベルの人。実にもつたいない話ですね。

さて、支給された金銭のこともちよろつと話しておこうか。支給されたのはなんと3000Gだ、3000Gだぞ。

リーダー様さまだよな。

わかりやすく俺の見解を交えて説明するのだが、まず貨幣にはB、S、Gの三つがあるわけだ。

Bはブロンズ、一般人の生活にはこいつとSのシルバーが使われる。

1Bは1円、1Sは100円くらいに思ってくれればいいよ。

Gはゴールド。

輝かしき金、黄金の鉄のかたまりの金。

1Gで1万円。

まあ、なんだ……金銭感覚が狂うよな。

リーダーの世界ではGが色んな所で使われるから仕方ないのだが普通のリーダー的には500〜1000Gくらいで金欠だとかなんとか。

ある意味では特権階級みたいなモノなので貴族ぶった馬鹿がいるのはこのGのせいだと思ってる。

賞金とか一番低くても500Gだし。

リーダー専門店で食べ物とか買うとバカっぽい値段になる。

肉もどき300G。

まあ、ひと月分だし許してやるよ。
モンスターのガタイもでかいし、ゴーレムとかドラゴンなんてちょっとした建物よりも大きいから維持費もそれ相応……か？
かなりピン撥ねされてると思うがどうなのだろうか。

上位になると大会賞品も狂ってやがる。

金銀財宝の塊みたいなのが出るのだが相場にもよるけど5000Gはくだらないとか。

マジやべえ。

やっぱり俺ってば勝ち組かもしれない。

フェニックスで大会を荒らすだけでばる儲けの予感……っ！！

フェニックスと何故か小屋で寝ていたテクノドラゴンがはしゃいでいたのでド突いて眠らせた。

まだまだだね、と指が6本になったり分身したりするアクションテニスの主人公風に言う。

静かになった今のうちにリオと強力して家具の整理を行う。

タンスとベッドの同時持ちとか俺ってばカツコ良すぎるだろ。

やべっ、入り口でつつかえた……。

すぐに整理も終わったので休憩を兼ねたお茶にしようとしたらリオに手伝ってほしいと頼まれた。

え、リオさん住むんですか？

週一または月一で来るだけでも構わないんだけど、僻地だし。

嫌なわけではなくて男と女が二人で住むのって問題あるじゃん？

いや、妹はノーカウントだろう。

まあ、問題が起きるようなことをする気はないけど。

ならいいですねって……Oh……。

何故か同棲が始まってしまった。

恋人もいないのに同棲を体験とかどこの一昔前のエロゲだ。

えっちいことには繋がらないのでギャルゲでしたね、すみません。

一体どんなフラグが立ったというのですか……。

いや、むしろ立っていない。

つまりリオの責任感と純粹な心の結果ということか！！

自分の身すらも犠牲にしてリーダーを目指すなんて愚直で不器用
だけどええ娘やなあ……。

リオが住むことが決定したので、部屋を決めて即整理、後に休憩と
してお茶を啜りながら空を眺めていたらテクノドラゴンがじゃれて
きた。

可愛いけど普通の人間が世話できると思えない。

子供とはいえドラゴンなので、結構な巨体なのだ。

ちよっとしたことで骨とか折れるのではないだろうか。

テクノドラゴンの頭を撫でていたら、目覚めたらしいフェニックス

が炎を飛ばしながらじゃれてきたので相手をする。

「選ばれた者のドミナント、お望みとあらば見せてやるっ!!」なんてリオに声をかけてからノリノリで遊ぶ。

「これが、私のドミナントだ、よく見ておくんだな!!」なんてテシヨンが最高潮に上がったときに叫んでいたらしい。
恥ずかしくて死にたい。

今ならガンパレード・マーチを歌いながら敵に突撃できる。

でもそのまま撃破数を稼いで生身で豪華絢爛 決戦存在に突入。
舞ちゃんを差し置いてヒーローになってしまっのでやっぱり突撃は無しだ。

ちなみに萌ちゃんこそ至高。

気絶したフェニックスを抱えて街へと向かう。

とんぼ返りだが必要な手続きを忘れていた俺が悪いのだ。

またもリオを背負い、フェニックスを担いで走る俺。

超速移動用の乗り物としても俺は成功しそうだと思ったのは、嬉しいやら悲しいやら。

街まで遠いのだが、あら不思議。

ドミナントと遊んでいるとすぐに到着。

リオは背中で「凄い、飛びながら戦ってる……」とか呟いているけ

ど君はそれを言うのが癖なのかね。

あと俺は飛んでいるんじゃないやなくて空気を蹴っただけだ。
ワンピースの月歩的なやつ。

魔力を震動させて、空気中の塵を固めることで走ったりもできる。
かなりの無駄スキルだが、使い勝手は中々良いのだ。
ちよつと高いところにある荷物を取ったりするときも楽々です。

街に再び戻って来たのはモンスターを協会に登録するのを忘れていたからだ。

ペット買うときにも許可証があったりするだろう、あれと同じ様なモノだ。

合体させたり、冬眠させたりしても手続きが必要になる場合があるのだが、今は必要ないので省略するとしてよう。

俺がカララギマンゴーを齧っていたら先に向かっていたリオが手続きをしていたらしく協会で話をして終わりらしい。

……フェニックスの名前がドミナントになっていた。

ま、まあ、フェニックスのままじゃダメだもんな。
賞金とか掛かってるし、ポジティブに行こう。

カウレア火山の守護として伝承と壮大な絵や銅像が存在するけど気

にせずいこう。

ノラモンリストに写真とか写ってるけど他モンの空似とでも言っておけばいけるいける。

討伐したって知らせたら暴動に発展するから、秘匿されるだろうし。俺のモンスターがフェニックスだなんてことは有り得ないし、討伐もされていないという暗黙の了解になるだろう。

一匹しか確認されていない『珍しいヒノトリ種』のモンスターを登録した人物とカウレア火山に一匹しかいないS級の『報奨金』を貰った人物が同じだとしてもなんら関係はないのだ。

むしろ協会のために尽力をつくそうとしている新人ブリーダーがいると感心するが、どこもおかしくは無い。

でも、偶然の一致ってこわいよねー。

俺はヒノトリを育成する権利を持っていなかったし協会で得ることも無かったが、ドミナントを管理する権利は得た。

協会に行ったらガチムチなモンスターに囲まれてドミナントが連れて行かれそうになったのでOHANASHIに興じることにしたが、やはりサイキョーの俺に敵うモンスターはいなかった。

どうやら俺のアギはドラゴン種のプレスを上回っているようだ。

これはアギダインではない、アギだ、とか出来るけどまずアギ系を使う敵がいないので脅威は伝わらないだろう。

一発ネタにすらならない虚しい一言として大気に溶け往くに違いあるまい。

モンスターは好きだが、俺に懐かないやつと他人のモノはどうでもいいと思う。

他人が大切にしている物が時にはゴミに見えるときって、良くあるじゃん？

流石の俺も協会の偉い人も前なので内心で罵詈雑言を浴びせながら、撫でるに留めたのだけれど。

俺って自重もできるんだぜ……だから褒めてくれよ、マジで……。

片手でゴーレムを持ち上げながら、どうしても俺が育成したいんです！ってバンダナを上に着ラツとかしながら真摯に頼み込めば不思議なことにお偉いさんはみんな頷いた。

なかなか頷かない頑固な老害もいてイラツとしてしまい、無意識にメギドで机を消し飛ばしたけど、特に何も無く平和だった。話し合いつてのは大事だよな。

武力行使は最後の手段だって俺の胸に響いたわ。

結局、書類上は育成ではなくて管理の権利だけど大して変わらんだろう。

大会に出ないようにつて言われたけど、それは無理な相談だ。

「俺も生活があるしお金を稼がないと大変じゃないですか。あ、みなさん服も良い物を着てらっしゃいますし、モンスターの育ちも良さそうですね。いやあ、懐があつたかそうですね……お小遣いほしいナー」とかバンダナ外しながらやったら自由に出ていいと許可までもらってしまった。

気分良く俺はメギドラオンの丘へと帰って行ったのだった。

街での話なんだが、俺とドミナントが歩くだけで店じまいするのはやめて欲しい。

リオが可哀相……一緒に歩かなければいいんじゃないね。
俺ってば最強で天才なんですよ！！

却下されました。

一緒に街に来たら共に市場を巡るべきらしい。
リオの真面目さに感服である。

次回予告

公式戦か、なんと都合の良いことか。
棄権すればいいものを……力量の差を理解できんひよっことどもには
勿体ないとすら思えるのだが。
いいだろ揉んでやろうじゃないか。

第四話 『おねとリオとドミニオン』 お楽しみに

おれとリオとフェニックス（後書き）

文の最後に書いてあった追伸と言う名のおまけを復活するか悩みますね。

蛇足ってレベルじゃないので、あれ。

まあ、何はともあれ不定期更新なのでゆっくりまっつてね！！！

おれとリオとドミナント

細々と生えた雑草、朽ちた木々、風にほんのりと含まれた塩の香り。周囲一面の寂れた空間が俺のファームだ。

生物が生きる環境としてはあまり好ましいとは言えないが、俺にとっては都合がいい。

どれだけ地形に被害が出ようとも、誰からも抗議を受けることのないファームでは自由が約束される。

だから手加減を間違えてドミナントを倒してしまったのも、俺の自由と言える。

……言えないよな、ただのミスだし。

澄み渡った青空の下で広大な大地を見渡しながらお茶を啜るがどこか物足りない。

紅茶に似たお茶ばかりが流通していて仕方なしに飲んでいるが、やはり日本茶が恋しい。

日本と文化が非常に似通った国が海の向こうにあるので手段を選ばなければ容易に手に入るが、良識内で得ようとするとかかなりの金を

積む必要がある。

だが、新人ブリーダーの俺には無駄に使える金はほとんどない。強奪せずに嗜好品を充実させるためにも俺はブリーダーとして稼ぎたい。

そんな事情があるのでどの大会に参加するカリオと相談しながら決める。

今週開かれる大会は公式戦のようで、今回はグレードを上げることにした。

通常の大会はどこかの商会や地域がスポンサーとなるが、公式戦は協会が主導する。

公式戦で優勝することが出来れば力量が認められ、ブリーダーは段位を得ることができる。

そして優勝したモンスターは一つ上のランクに挑戦できるようになるのだ。

つまりグレードとは育成しているモンスターの強さと参加できる大会の上限をランクとして表しているのだ。

今はEだが、Dへと昇格すればDとEの両方の大会にも出場できるようになる。

ゲームだと下のランクに参戦するとファンがガツカリして人気落ちるのだがこの世界だとどうなるのだろうか。

とあるモンスター達は一つ上のランクに参加できるという特権を持っている。

俺のドミナントも似たようなモノなのだから上位に出場できる特権を認めて欲しいくらいだ。

ドミナントをEランクに出場させるのは心苦しいが金稼ぎには代えられない。

しょうがないのよね、これってブリーダーの定めだから。
ファームの体裁を整え、ライフラインを繋いだらあつという間に支給額が溶けてしまったので貯金を切り崩す予定だったが、ノラモン討伐金3000Gのおかげで何とかやっていけそうだ。
当面の間はこれで凌いで開催される大会に乗り込んで、畳を買うのが今年の目標である。

気絶したドミナントにディアラハンをかける。
ディアラハンとは味方単体のHPを全回復する回復魔法だ。
これの御蔭でドミナントを思う存分ボコれ……修行できる。
サマリカームという行動不能から回復できる魔法があるのだが、効果が重複している気がする。
死亡から蘇ったりとかするのかもしれないが予測の域を超えない。
さすがの俺も試すのが躊躇われる。
魔法一つの為に死ぬのも嫌だし、殺すのも嫌だ。
死にかけたときに使ってみようと思うが、ディアラハンですぐに回復するから検証できる日がくるのかわからない。

目覚めたドミナントと戦闘。

当たり前のように小屋に住み着いたテクノドラゴンも参戦してファ

ームの真上は魔法やビーム、プレスが飛び交う混沌へと陥った。
マカラカーンで反射、余裕でした。
マカラカーンとは魔法を反射する魔法で、モンスターの遠距離攻撃のほとんどを跳ね返すことができる。
ロケットパンチやズームパンチのような物理攻撃は無理だ。
時々、「コンセントレイト……テンタラー！」と意味の無いコンボをしたくなるのだがなぜだろうか。

気絶したドミナントとテクノドラゴンに回復魔法をかけて一息つく。
「テクノドラゴンの名前を決めなくては……テクモでもいいかもしれん、発売元的に考えて」とか考えながらリオを探す。
すぐに後姿を見つけることが出来た。

今日のリオの髪型はポニーテール、健康的で実によいです。
どうやら街に行ったときに試しに頼んだ宅配便が来たらしく、荷物を置いて去って行った。

恐竜型のモンスターであるロードランナー3匹が届けに来たらしく、リオのサインを貰うとすぐに街へと引き返していった。

届いた荷物の品質は期待以上だった。

手荒に扱われていても仕方ないと思っていたので嬉しい限りだ。

街で代金を先払いして注文するだけだし今度から鼻屑にさせてもらおう。

飲食物は定期的に届けてもらおうようにするのもいいだかもしれない。
ゲームのようにショップを選択するだけで気軽に買い物、とはいかないのだ。

大会に出場するし、その折に注文を済ませば無駄に行き来することも無くなるし。

ファームは悪くないが、辺鄙な位置だから「でえじょうぶだ、ドラ

ゴンボールで生き返る」くらい軽々しく何でもできないのだ。
まあ、ドミナントとテクノドラゴンがいるので不便では無いだろう。

週末になり、公式戦が開催されるので街へと訪れた。

ドミナントとテクノドラゴンを連れ歩く俺はきつと一流のブリーダーに見えるだろう。

実際は初心者マークすら取れていない新米のペーパーなのだが、S級に殴り込んでも問題ないのできつと俺は一流。

大会のエントリー手続きまで時間があるので適当な店に入ってリオと賢沢なティータイムに突入したかったがモンスターを連れながら入れる店が無かったでござる。

探せば見つかるだろうが、そんな時間も無い。

仕方ないので「いいぜ、お前らが店を閉めるって言うなら俺のドミナントがその幻想をぶち壊す!!」なんて悪ノリしながら街を練り歩く。

目を合わせた瞬間逸らされたりするけど、絶対に逆効果だろ。

絡みたくなくなってくるし、むしろ絡んで欲しいんだろ？

まったく……DMな連中だな。

俺がメンチビーム、ドミナントが火力を上げて輝く。

ほづら、明るくなつたろう。

リオさんに怒られたけど問題ない。

正座するドミナントがすごく、シニールです。

あ、はい。

すみません、バンダナは取らない様にします。

テクノドラゴン、慰めてくれるんだな……。

優しいやつだよ、おまえは。

ちよ、俺のカララギマンゴー盗るな。

おのれ、食い物目当てか!!

会場の前まで来ると人がごった返していたが、俺たちには関係なかった。

進行方向にいる連中が勝手に散っていくのでモーゼの十戒?とかいうやつみたいな気分で受付まで歩く。

「なんて凶悪な……」とか、「貫録がYABEEEEEE」とか、

「へへ、今日のSランクは見ごたえがあるぜ」とか、話し声が聞こえる。

悪いがコイツはEなので皆の期待に応えられそうにないよ。
俺のブリーダーランクもE、グレードもEなので残念だがEに出場する。

参加者には悪いが犠牲になってもらうしかないのだ。

登録を終えてさあ、行こうと気合を入れたら声をかけられた。

後ろに立っていたのは石の躰を持つドラゴン・ジハードを連れたオレンジの色眼鏡をかけた長身の男だった。

ジハードとはドラゴンをベースにし、ゴーレムをサブとして混ぜたモンスターである。

凄まじいパワーがあるのだが、ドラゴンの欠点である短命を引き継いでいるために育成はかなり難しい。

新入りか？いいモンスターだな……これから楽しみ云々。

皮肉気な笑みを浮かべながら去って行ったが胡散臭さが隙間BBA並だ。

空色の髪の毛、猫背気味の姿勢、意味深な笑い、色眼鏡、俺よりも頭一つ分は高い身長。

どう見てもオーヴァンです、あだ名は決まったようなモノだ。変化球として犬童雅人とかインドウ、マサトでも可。

とりあえず左腕は正常だったので未帰還者にされることは無いに違いない。

AIDAとか感染しても味方全体の状態異常を治療できる魔法・アムリタで解決しそうだ。

駄目だったらメシアライザーするから大丈夫だ。

しかし、さすがモンスターファーム2である。

オーヴァンが出場しているとはこれからが地獄だぜ。

公式戦か、なんと都合のいいことか。

それだけが大会後の感想だった。

結果は優勝だったがどうも納得のいかない展開だった。

不完全燃焼といってもいい。

やはりEランクに籍を置くモンスターではドミナントを前にすることすら難しかった。

戦闘前に睨みつけるだけでほとんどのモンスターが気絶してしまっただのだ。

どうにか堪えても、近づこうとして熱風に煽られて倒れるといった不始末。

棄権すればいいものを……力量の差を理解できんひよっこともには勿体ないとすら思えるのだが、敵前で構えるドミナントの律儀な性格故だろうか。

ほとんど何もしていないのに病院直葬……直送である。

棄権したブリーダーのワームが準優勝していた。

彼は大物になる、とか思わせぶりに呟いてリオを驚かせる。

正直、俺には全くわからんが才能はあると思う。

俺よりは確実に。

モンスターが怯えるってブリーダーとしては致命的だからな。

いいハンターは動物に好かれるって狩人漫画のカイトが言ってたけど、モンスターに嫌われる俺はなんだというのだ、そしてブラックリストハンターも動物に好かれた方が優秀なのだろうか。
まあ、あのワームも上手く育てたら羽化 変態コンボで別の姿になれる。

でも初代と違って2は羽化しても補正が特に無いのであまり嬉しくはない気がする。

賞金を受け取り、周りの視線を受け流し、リオと合流。

この後は宅配を頼んで、露天を冷やかして帰る予定だが物足りない。困惑と怯えの入り混じった視線の方向へと顔を向け、そいつらのモンスターを眺める。

強さはD、よくてCの中位といったグレードだ。

これでは足りないどころの話ではない……。

この程度ではドミナントが育っているのか、全くわからない。数値は上昇しているが、実戦での変動を見たかったのだが。

「何が足りない？」

せせら笑うようなオーヴァンの声。

笑っている姿はやはり胡散臭さでいっぱいだ。

ジハードの歩く姿を見ても、振れ無い軸を見せつけられるだけだ。練度は最高クラスだろう。

闘ってみたが、俺はEランクごとき。

S級との私闘なぞ、それこそ協会が黙っていないはず。

「目的は果たしたのだろう。それでも足りないというのなら」

いいだろう揉んでやるっじゃないか

佇んでいたジハードが咆えた。

それは地の底から響く、怨嗟のよう。

おどろおどろしい咆哮だった。

ひどく魅力的だ。

足元が揺れている様に、心も揺らされた。

S級の力量を実際に試す機会なぞ、今の俺ではありえない。協会を無視して戦いに興じたい……が、街中でやるわけにはいかない。

出場停止や権利の取り消しなんて喰らったら目も当てられん。

それに、すぐ近くにはリオもいる。

残念だが……頗る残念だが、断った。

だろうな、などと喉を鳴らしてオーヴァンは心底愉快そうに飛び去って行った。

挑発してきたのはドミナント「フェニックスを知って試しに来たか、それとも別の目的か。」

オレンジ色のレンズの向こうにある瞳からは判断が付かなかった。

ただの愉快犯の可能性もあるから困る。

呆けているリオを担いでドミナントに飛び乗る。

騒ぎが広がる前に逃げなければ面倒事に繋がりそうだからな。

露天の冷やかしはまた後日だ。

レッドから祝いの手紙が届いたのは次の日だった。

早すぎるだろ、手紙。

自分の足で届けに来たとか無いだろうな……。

手紙の名前にレッドって書くのは気に入ってるってことでいいよな。
これからもレッドと呼ぼう。
なんてことを考えながらほんのりと甘い茶を啜る。

嗚呼、渋い茶が飲みたい。

次回予告

わからんのか？
イレギュラーなんだよ。
やりすぎたんだ、おまえはな！！

第五話『おれとリオとドミニナント、ときどきドラゴン』お楽しみに

おれとリオとドミナント(後書き)

変更点

ゲイヴン オーヴアン

ディアボロス ジハード

次回までゆっくり戻っててね!!!

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1720z/>

いくせい、もんすたあ！！

2011年12月9日01時48分発行